

特集

経陰分娩 vs 帝王切開 —分娩様式の選択と対応—

企画者のことば

桑原慶充*

産科臨床においては、母児の状況によって、経陰分娩で臨むか帝王切開を選択するか迷うことが少なくありません。分娩様式の多くは相対的適応より決定されることから、母児のリスクとベネフィット、自施設の診療体制、妊産婦の希望など様々な要素を勘案した総合的な判断が求められます。遷延分娩や、帝王切開後試験分娩(TOLAC)、分娩中の常位胎盤早期剝離、重症高血圧に際しては、刻一刻と変化する状況に対する迅速かつ高度な臨床的判断が求められ、日頃から自分のなかで基準をもっておくことが重要です。また、分娩様式の考え方は医療事情や社会的背景を反映して時代とともに変化するため、現代の潮流についての理解をアップデートしておく必要があります。帝王切開にすべき

かどうか迷うとき、診療ガイドラインの参照からはベストプラクティスが見出せず、最終的には現場のコンセンサスに委ねられることも多いと思います。

そこで本特集では、様々なケースにおける分娩様式の判断、それぞれを選択した場合のリスクや対処法について、最近の動向を踏まえてエキスパートの先生にご執筆いただきました。分娩様式の選択をテーマにすると、周産期の主要病態が広く網羅されることに改めて気づかされます。エキスパートによる自験例を交えたメッセージをご一読いただき、一層クオリティの高い周産期医療の実現にお役立ていただければ幸いです。

*Yoshimitsu Kuwabara 日本医科大学産婦人科学